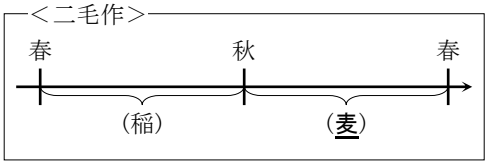
　© 不許複製禁転載

［A］農業の発達－テキストP30対応－

中世の農業・商業などの社会経済史は，鎌倉時代と室町時代を複合して出題してくることが多い。つまり，それぞれの歴史語句が「鎌倉時代」にあたるのか，「室町時代」にあたるのかが重要になってくる。ゆえに，テキスト上でそれぞれの語句が左項目（鎌倉時代）・右項目（室町時代）のどちらに掲載されているのか，時代の違いを意識しながら理解していってほしい。

鎌倉時代・室町時代における農業について，いきなり結論から言うと，この時代には「農業の集約化・多角化」が進んで，農業生産力が飛躍的に向上したんだ。…と言われても，「集約化」とか「多角化」とか抽象的に言われてもピンと来ないと思うので，具体的にいくつか中身を見てみよう。

例えば，今までの栽培法では，一つの田んぼで，春に種籾を蒔いて秋に稲を収穫するだけだった。でも，これはもったいない。だって，秋から翌年の春にかけては何もしていないんだもの。そこで，鎌倉時代になると，春から秋には稲を栽培し，秋や冬に麦を蒔いて，それを春に刈り取る**二毛作**が畿内や瀬戸内などの西日本で行われるようになるんだ。



これは非常に効率的だ。そのため，室町時代になると，東日本も含めた全国的に二毛作が普及していくんだ。こうした時期的な違いは正誤問題の定番になるので，気をつけておこう。

＜二毛作の普及＞
鎌倉時代＝**二毛作**が畿内・西日本で普及
室町時代＝**二毛作**が全国的（東日本）に普及

Ⓒ **二毛作**『新編追加』

諸国の**百姓**，田稲を刈取るの後，其の跡に麦を蒔く。田麦と号して，**領主**等件の麦の所当を徴取すと云々。租税の法豈然るべけんや。自今以後田麦の所当を取るべからず。宜しく農民の依怙たるべし。此の旨を存じ，備後・備前両国の御家人等に下知せしむべきの状，仰せに依て執達件の如し。

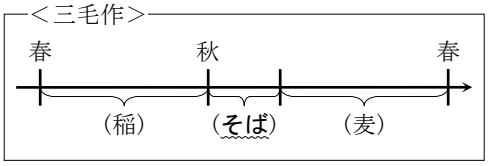
文永元年四月廿六日

（諸国の**百姓**は田の稲を刈り取った後，そこに麦を蒔いている（**二毛作**をさす）。それを田麦と呼んで，**領主**達はその麦の所当（**年貢米以外の雑税**）を徴収しているということである。これは租税の法として適正といえるだろうか。今後は田麦の所当（**年貢米以外の雑税**）を取ってはならない。農民の依怙（**収益**）とする。この趣旨をよく弁え，備後・備前両国の御家人達に命令せよとの将軍家のご命令によって，以上の次第を通達する。）

文永元年（1264 年）4 月 26 日

上記の史料では，以下のような事情がうかがえる。鎌倉時代に**二毛作**が行われるようになったことで，**百姓**たちは麦からも**収入**（史料文中の依怙）を得られるようになった。でも，地頭などの**領主**がその麦にも**雑税**（史料文中の所当）をかけようとしたため，鎌倉幕府は「二毛作で農民たちが生産した麦は，農民たちの収入であるのだから税金をかけないように」という法令を出したわけだ。

ただ，室町時代に二毛作が全国的に普及したことで，東日本が追いついた！…と思っていたら，農業先進地域である畿内はすでにその先を行っていた。それが畿内一部で普及した**三毛作**だ。これは一つの田んぼで稲と麦と**そば**を栽培するというもの。具体的に述べると，春に稲を蒔いて，秋に収穫する。その後，一か月ほどで早期に収穫できるそばを蒔き，そばを刈り取った後に麦を蒔くというもの。二毛作や三毛作のように，一つの田んぼで複数の作物を作っちゃう，これが「集約化」の一番わかりやすい例と言えるんじゃないかな。



なお，三毛作というのは世界的にもなかなか珍しかったため，1420 年に朝鮮使節として日本にやってきた宋希璟は，その時の紀行文『老松堂日本行録』に三毛作のことを記している（宋希璟は，1419 年に朝鮮が対馬を襲撃した応永の外寇に対する説明をするため 1420 年に来日した）。

Ⓒ 三毛作『老松堂日本行録』by 宋希璟

阿麻沙只村に宿して日本を詠ふ

日本の農家は，秋に水田を耕して大小麦を種き，明年初夏に大小麦を刈りて苗種を種き，秋初に稲を刈りて木麦を種き，冬初に木麦を刈りて大小麦を種く。一水田に一年三たび種く。及ち川塞がれば則ち水田と為し，川決すれば田と為す。

（尼崎村（摂津国（兵庫県）尼崎）に宿泊して，日本のことを詠う）

（日本の農家では，秋に水田を耕して大麦・小麦を播き，翌年の初夏にその大麦・小麦を刈り取って稲の苗を植え，秋の初めに稲を刈り取ってそばを播き，冬の初めにそばを刈り取って大麦・小麦を播くのである。このように一枚の水田に一年に三回も栽培を行う（三毛作をさす）。これができるのは，川の流れを堰き止めて田に水を引き入れれば，たちまちに水田となり，川の堰を切って水を流し出せば，たちまちに陸田とすることができるからである。）

ただ，二毛作・三毛作を行うということは，同じ田んぼで作物を連チャンで栽培するということ。さすがに田んぼだって疲れちゃうので，ドーピングをしてあげる必要がある。つまり，肥料を与える必要が出てくるわけだ。そのために，鎌倉時代に普及した肥料が，刈り取った草を田んぼに埋めて腐らせる刈敷と，草木を焼いて灰にする草木灰の 2 つだ。まあ，それぞれの違いは，後者に「灰」という字がついているのだから「草木を焼くのが草木灰」だなって区別できるだろう。

＜入会地＞

鎌倉時代から肥料として使用された刈敷や草木灰は，草や木を利用したもの。だから，これらは山や林などで採取しなければいけない。このような，草木を採るために出入りした山林や河川など農民たちの共同利用地のことを入会地と言う。

なお，室町時代になると，今までの刈敷・草木灰に下肥という人糞尿も加わる（噛みくだいて言うとウンコ・オシッコのこと）。あくまでも，刈敷・草木灰から下肥に変わったわけじゃなく，刈敷・草木灰に下肥が加わっただけなので，誤解しないようにね。

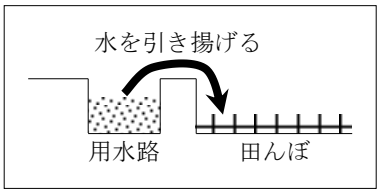
さて，二毛作・三毛作から話をさらに発展させてみよう。二毛作や三毛作では，一つの田んぼで稲以外の作物を栽培するわけだから，出来るだけ早く稲を収穫する必要性も出てくる。じゃないと，麦やそばを作る期間が短くなってしまうからね。そこで，鎌倉・室町時代には，二毛作・三毛作に合わせて早く収穫したり，災害対策として遅く収穫したり，稲の品種改良が行われたんだ。

それが，早期に収穫できる早稲，そのままの時期に収穫する中稲，収穫の時期を遅らせる晩稲だ。細かく述べると，早稲・中稲・晩稲は鎌倉時代から開始され，室町時代に普及していったんだけど，入試問題では室町時代における「早稲・中稲・晩稲の普及」が問われるので，テキスト内では室町時代にのみ「早稲・中稲・遅稲の普及」を載せている。

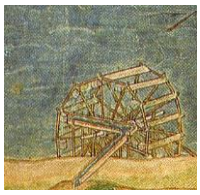
こうした早稲・中稲・遅稲によって収穫の時期をずらしておけば，二毛作・三毛作の効率もよくなるし，凶作などのダメージも減らすことができる。また，この他の凶作対策としては，鎌倉時代に中国から輸入された大唐米という多収穫米もあったんだけど（見た目が赤いことから赤米，中国から輸入されたことから唐法師とも呼ばれた），…これはクソ不味い。まあ，害虫とか悪天候にも強かった上に，たくさん収穫できたから，あくまでも凶作対策として栽培されたものなんだけどね。

〔大唐米〕

鎌倉・室町時代には揚水機や耕作技術も発展している。なお，揚水機とは用水路などから田んぼに水を引き揚げるために使用する農具のこと。弥生時代でも同じ図解をしたけど，用水路と田んぼを断面図でみると，右図のようになる。その用水路から田んぼに水を引き揚げることを「揚水」と言うんだったよね。

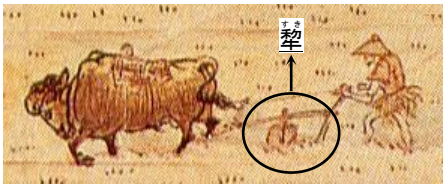


その揚水機として，室町時代から用いられたものが**水車**と**龍骨車**の２つだ。前者の水車は，名前の通り川の水の流れを利用して田んぼに水を引き入れる揚水機。それに対して，龍骨車は中国から伝来した揚水機で，２人組で下の棒の部分を足でくるくると回すと，傾斜した部分の水かき板が上方に送られ，水を田んぼに汲み上げることができる。ただ，仕組みが複雑すぎて，壊れやすいという問題点があったんだけどね。


〔水車〕

〔**龍骨車**〕

また，耕作技術としては，鎌倉時代に田んぼを耕すための鎌・鍬などの鉄製農具が普及し，牛や馬などに**犂**を引かせる**牛馬耕**も広がったんだ。牛馬耕とは，土を掘り起こしたりする際には，かなりの労働力が必要になるので，右絵の『**松崎天神縁起絵巻**』のように，馬や牛などを利用するものだ(牛に犂を引かせる場合を牛耕といい，馬に犂を引かせる場合は馬耕という)。



〔牛耕 in『**松崎天神縁起絵巻**』〕

［B］諸産業の発達－テキスト P30 対応－

ここまで見てきたように，中世には二毛作・三毛作や，肥料の使用・品種改良などの農業の「集約化」・「多角化」が進んだ結果，農業生産力が向上した。そのため，農民たちの生活にも余裕が生まれること，有効に使える時間が増加することになるんだ。じゃあ，その余った時間に，農業以外の副業に精を出せばいいよね。そこで，時間的な余裕を利用して，手工業品を生産したり，商品作物(米以外の作物)を栽培したりするようになり，諸産業も発達していくんだ。

先ほど，鎌倉時代には「鉄製農具が普及した」と述べていたけど，それらの需要が増えれば増えるほど，鉄製品などの手工業品を生産する者が増えていくよね。そして，その中には手に職をつけて，農業を辞めて手工業の生産だけで生計を立てる専門的な者も出てくる。つまり，こういった手工業品の生産を専門とした職人が登場してくるわけだ。

その職人における代表格として鎌倉時代に登場したのが，鉄製農具・鍋・釜などの「鋳物」をつくる**鋳物師**や，武器・刃物などの「打ち物」をつくる**鍛冶師**だ(金属を溶かして型に流し込んでつくる農具・鍋・釜などの鉄製品を「鋳物」，カンカン打ってつくる刀や槍などの鉄製品のことを「打ち物」という)。

鎌倉時代に鉄製農具が普及した背景には，その鉄製農具を作る**鋳物師**の存在があるしね。また，鎌倉時代という武士が政権を担う時代になれば，武士が使う刀の需要が増えるから，刀鍛冶も増えていくよね。なお，その鎌倉時代の刀鍛冶としては，京都の**粟田口吉光**や，備前の**長船長光**，鎌倉の**岡崎正宗**がいる(文化史で学習する内容だが，追加の知識としてテキストに書き込んでおくのもよいだろ

＜刀工の覚え方＞
「今日はアワビでオッサン，構おうか」
→今日 は アワ ビで オッサン かま おうか
京都 粟田口吉光 備前 長船長光 鎌倉 岡崎正宗

室町時代になると本格的な職人の種類が増加していく。引き続き農具などの鉄製品を作る鋳物師や，刀などを作る鍛冶師はもちろん，鎧を作る鎧師，大工にあたる番匠など新たな職種も登場するんだ(室町時代頃から大鋸と呼ばれる２人がかりで交互に挽く大きな鋸の用いられるようになり，この大工道具の登場が板材の加工技術に格段の進歩をもたらしたので余裕があったら押さえておくといい。木材を挽いた時に出る木屑のことを「大鋸屑」と言うしね)。なお，こうした職人たちの様子は『職人尽絵』に描かれているが，ほとんど出題されることはない。

〔各職人の様子 in『職人尽絵』〕

一方，農業を続けながら，米以外の商品作物を作る者も出てくる。正確には五穀(稲・麦・粟・黍・豆)以外の作物を商品作物というんだけど，鎌倉時代になると荏胡麻(灯油の原料)・藍(染料の原料)・楮(紙の原料)・桑(蚕の食用となる)・苧(縮・晒など麻織物の原料)などが作られるようになるんだ。

なお，荏胡麻と苧以外は，江戸時代の近世社会経済史で特産地まで含めて再び登場するから，ここでは覚えなくていい。さらに，こうした商品作物を製品に加工する製紙業・絹織物業・麻織物業などが室町時代に発展するんだけど，これも江戸時代で登場するので，その時にゴロで覚えればいい。

ただし，江戸時代の近世社会経済史で登場しないため，この中世社会経済史で押さえておきたいものが一つだけある。それが陶器を作る製陶業。まあ，簡単に言えば「焼き物」のことなんだけど，室町時代には茶の湯が流行したことで，茶入や茶壷などの茶道で用いる「焼き物」が多く作られるようになるんだ(近世には楽焼・萩焼・薩摩焼・有田焼・京焼など多くの焼き物が作られるが，それらとは時代が異なるため，中世の焼き物はここで覚えておいてほしい)。

中世の代表的な焼き物としては，平安時代から生産されていた越前焼・備前焼・丹波焼や，尾張の常滑焼(平安末期から尾張国常滑市で焼かれた陶器)，近江の信楽焼(平安末期から近江国紫香楽宮があった地で焼かれた陶器)に加えて，鎌倉時代から生産された尾張の瀬戸焼(鎌倉時代に道元に従って入宋した加藤景正が伝えたとされる陶器で，文化史で学習する)が有名だね(まとめて六古窯という)。

＜中世の焼き物＞
- 越前焼(福井県丹生郡で平安時代から生産)
- 備前焼(岡山県備前市で平安時代から生産)
- 丹波焼(兵庫県篠山市で平安末期から生産)
- 常滑焼(愛知県常滑市で平安末期から生産)
- 信楽焼(滋賀県甲賀市で平安末期から生産)
  - ※近江国の紫香楽宮があった地
- 瀬戸焼(愛知県瀬戸市で鎌倉時代から生産)
  - ※道元に従って入宋した加藤景正が伝えたとされる(景正の実在を疑う説あり)

＜近世の焼き物＞
- ①楽　焼(千利休の指導を受けた長次郎が創始)
- ②お国焼(豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に大名が連行してきた朝鮮人陶工による焼き物)
  - (1) 萩　焼(毛利氏のもとで李勺光・李敬が創始)
  - (2) 薩摩焼(島津氏のもとで金海・朴平意が創始)
  - (3) 平戸焼(松浦氏のもとで巨関が創始)
  - (4) 有田焼(鍋島氏のもとで李参平が創始)
    - →江戸時代に酒井田柿右衛門が赤絵を大成
- ③九谷焼(有田焼の技法が加賀に伝わり創始)
- ④京　焼(野々村仁清が色絵陶器を大成)

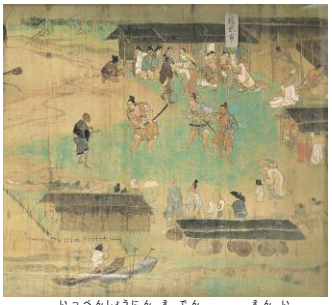
あとは，日明・日朝貿易で学習した箇所だけど，室町時代に朝鮮から輸入されたものとして木綿があったよね(日明貿易で輸入されたものとしては生糸があった)。この当時の衣服の原料には麻が用いられていたんだけど，木綿は今までの麻よりも丈夫で，なおかつ冬でも暖かかったので，日本でも衣服として非常に重宝されたんだ。そのため，これ以降木綿は国内でも栽培されるようになって，三河国などがその木綿栽培の中心となっていったんだ(江戸時代になると，三河・尾張・大坂周辺が木綿

［C］商業の発達－テキストP30対応－

農業生産力の向上に伴って，農村では商品作物や手工業品などが生産されるようになった。そして，これらの商品を売買するための市場が，各地の荘園・公領内で開かれるようになっていくんだ。つまり，農業の発達によって，商品が出回るようになったことで，商業も発達していくわけだね。

こうした商品の売買を行うため，鎌倉時代になると，月に3度開かれる**三斎市**という定期的な市場が開かれるようになるんだ。なお，その三斎市の様子として，**円伊**(一編の弟子)が描いた『**一遍上人絵伝**(時宗を開いた一遍の生涯を描いた絵巻物)』に，**備前国**(現在の**岡山県**)にあった**福岡市**の様子が描かれている。

これ，ひっかけ問題の定番だから間違えないようにね？備前国は現在の岡山県にあたるのに，「福岡市」に引っ張られて「福岡県の福岡市！」って短絡的に答える受験生がいからね…。また，『一遍上人絵伝』には，**信濃国**(現在の長野県)の**伴野市**の様子も描かれているけど，こちらはほとんど出題されることはない。



〔一遍上人絵伝〕by円伊
備前国(岡山県)福岡市の様子

これが室町時代になると，さらに需要と供給が増えていくので，もっと多くの市が開かれるようになる。それが室町時代の応仁の乱(1467)前後に一般化した月に六度開かれた**六斎市**だ。

＜定期市の開催＞
鎌倉時代＝**三斎市**(月に3度開催)
室町時代＝**六斎市**(月に6度開催)

一方，月に3回か6回開かれる定期市に対して，いつでも商品を販売できるように，商品を「見せる」ための「店」を構える者も出てくる。こうした商品を売るために設けられた常設の小売店を**見世棚**(**店棚**)と言うんだ(商品を「見世」ることが，「店」の語源となった)。なお，鎌倉時代に登場した頃は「見世棚」と書き，数が増加していった室町時代になると「店棚」という字もあてられるようになるんだけど，「漢字3字で記せ」とくるので，「見世棚」で覚えておこう。

〔見世棚〕

でも，店を構えて客が来るのを待つ手もあれば，客を探して自ら売り歩く手もあるよね。このような，買い手を求めて自ら売り歩くする行商人も鎌倉時代に登場するようになるんだ。

そして，室町時代になると，**連雀商人**や**振売**，**桂女**や**大原女**などいくつかの種類に行商人が分かれていくんだ。**連雀商人**というのは，「連雀」という木製の背負い道具を背負って売り歩く商人で，**振売**というのは天秤棒を振り歩いて呼び売りをする商人。覚えられなかったら，昔話の「雀のお宿」に出てくる「つづら」みたいなものを背負っているのが連雀商人で，天秤棒に入れた商品を振りながら売り歩くのが振売と考えればよいね。

〔連雀商人〕

〔振売〕

その一方で，女性の行商人もいる。それが京都洛西の桂という地域に住んでいて，鮎・朝鮮飴を売り歩く**桂女**や(京都の桂付近には桂川という川が流れており，そこで獲れた鮎を桂女が売り歩いていた)，京都北東部の大原という地域に住んでいて，炭・薪を売り歩く**大原**

〔桂女〕

〔大原女〕

こうした商業が発達するに伴って，取引に用いられる貨幣の需要も増大していく。もともと平安時代までは物々交換が中心だったけど，鎌倉時代には日宋貿易で宋銭が輸入されるようになったし，室町時代には日明貿易で**洪武通宝**(明の洪武帝が鋳造)・**永楽通宝**(明の永楽帝が鋳造)・**宣徳通宝**(明の宣徳帝が鋳造)などの明銭が輸入されるようになったよね(鎌倉幕府・室町幕府は貨幣を鋳造しなかった)。なお，宋銭・明銭のどちらも銅で鋳造された**銅銭**であることと，洪武通宝・永楽通宝・宣徳通宝は日本に輸入された順に記してあるけど，日本で最も流通したのは**永楽通宝**になるので気をつけてね。

〔洪武通宝〕

〔永楽通宝〕

＜**撰銭令**＞

室町時代になると，貨幣経済が浸透し，武士も農民も貨幣を用いるようになったため，貨幣の需要も高まるようになった。ところが，逆に貨幣が足りなくなるという問題点も生まれてしまったんだ。もちろん，宋銭や明銭を輸入しているけど，日本全国の人々が貨幣を用いるようになると，さすがに宋銭・明銭だけでは足りなくなってしまう。そのため，**私鋳銭**という国内で鋳造された質の悪い貨幣が出回るようになってしまったんだ。

こうして，国内では宋銭・明銭のような良銭や，私鋳銭のような悪銭が出回るようになるんだけど，じゃあ商取引の時に商人たちはどちらを使いたがるだろう？もちろん，前者の良銭だよね。そして「お客さん，悪銭で支払われても困ります」と，悪銭での受け取りを拒否する行為が多発していくんだ(こうした悪銭での受け取りを拒否する行為を**撰銭**と言う)。

撰

〔私鋳銭①〕

でも，撰銭という行為が行われると，売り手も買い手も悪銭での受け取りを嫌がるから，経済は混乱してしまう。そこで，こうした撰銭行為を制限するために，室町幕府や戦国大名は**撰銭令**という法令を出したんだ。

撰銭令の主な内容は，以下の３つ。まず，〔私鋳銭③〕のような極端な悪銭は使用禁止とする。さすがに，こんな欠けちゃっているボロボロな悪銭などは，みんあ取引したがらないから使用禁止だ。

〔私鋳銭②〕

ただ，全ての悪銭を使用禁止にしてしまうと，貨幣の量が足りなくなってしまう。そこで，まだマシな〔私鋳銭①〕・〔私鋳銭②〕のような一部の悪銭は使用を認めるんだ。形は若干イビツだけど，ちゃんと原型は留めているからね。

でも，その悪銭と，宋銭・明銭のような良銭が同じ価値になるわけがない。そこで，その悪銭と良銭の交換比率を定めたんだ。例えば，良銭１枚と悪銭３枚であれば交換できる，といったことだね。

〔私鋳銭③〕

これで，撰銭と撰銭令がそれぞれ真逆のものだということがわかったと思う。なお，撰銭令はあくまでも撰銭行為を制限したものであり，一部の悪銭などの使用は認められているので，正誤問題における「全ての悪銭の使用を禁止した」という内容は誤りになるので気をつけてね。

C　撰銭令『蜷川家文書』

定　**撰銭**の事，京銭・打平等を限る
右，唐銭に於ては，善悪をいとはず，少瑕を求めず，悉く以て諸人相互いに取り用ふべし。……

(定む　**撰銭**について，京銭(南京銭という中国南京辺から輸入された悪銭)・打平(品質の劣った小さい銭を鎚で打って大きく伸ばした悪銭)などの粗悪銭に限定して撰銭を行う(他は禁止する)。

このことについて，中国からの渡来銭(宋銭・元銭・明銭)については，良し悪しに関係なく，小さな傷のあることなどはいわず，すべて皆誰もが使用せよ。……)

中国から輸入された**銅銭**(宋銭と明銭はどちらも銅で作られた銅銭)により，鎌倉時代から日本でも貨幣経済が浸透していった。そうなると，貴族・寺社などの荘園領主も，荘園からの年貢を米じゃなく銭で納めてもらった方が手っ取り早い。そのため，鎌倉時代後期から年貢などを貨幣で納める**銭納**(**代銭納**)が始まっていくんだ(銭納(代銭納)は室町時代に一般化した)。

上記のように，各地の荘園から，都にいる貴族・寺社などの荘園領主のもとに年貢が納められることで，遠隔地での取引も活発化していく。そのため，鎌倉時代には年貢などの商品の輸送を行う**問丸**という運送業者も登場してくるんだ。

＜**為替**＞

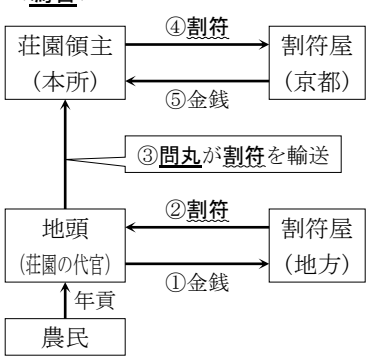
米などの商品輸送に対して，現金を輸送する際は危険がつきまとう。1 億円をキャリーケースに入れて持ち歩いたりするのは，さすがに怖いでしょ？そこで，遠隔地の金銭取引の際に用いられたのが**為替**という方法なんだ。

例えば，武蔵国(現在の東京都・埼玉県)の荘園に住む地頭が，山城国(現在の京都府)にいる荘園領主のもとへ 100 万円の現金を輸送するとしよう。

まず，武蔵国にいる地頭は，武蔵国にある割符屋(為替を扱う業者)に 100 万円の現金を持って行く(図①)。そうすると，その割符屋から**割符**という手形・小切手を渡されるんだ(図②)。まあ，「現金 100 万円なり」とか書いてある紙切れだと思ってくれるといい。そして，この割符を運送業者の**問丸**を利用して都へ輸送してもらうんだ(図③)。

あとは，都にいる荘園領主が割符を受け取ったら，都にある同じ系列の割符屋に持っていくと(図④)，100 万円の現金と交換してもらえるわけだ(図⑤)。

＜**為替**＞



ここで気づいたかな。地方と都の間で現金自体の輸送は行われていないよね。こうした遠隔地間の金銭輸送を**割符**という手形・小切手を用いて行う決済方法を**為替**と呼ぶわけだ。まあ，現在も銀行などの金融機関で利用されている為替も同じシステムだしね。

この鎌倉時代の問丸から発達したのが室町時代の**問屋**なんだけど，問丸と問屋は間違えやすいので気をつけてほしい。なお，具体的な違いは特に問われないんだけど，鎌倉時代の問丸は，ただ単に商品を管理したり輸送したりするだけの運送業者に過ぎなかった。それに対して，室町時代の問屋になると，卸売業者として農村などから商品を仕入れ，それを小売商人たちに売り渡す仲介役となっていくんだ。

＜問丸・問屋の覚え方＞

「その問いはマルやで」

→問いはマル　やで

問丸　問屋

つまり，商品の保管や売買をする江戸時代以降の「問屋」とまったく同じだね(近世以降「といや」が訛って「とんや」と呼ばれるようになった)。だから，「問屋」が自ら商品輸送を担当することはなくなって，その支配下に置かれた別の運送業者に任せるようになるんだ。それが陸上輸送を担当する**馬借**や**車借**だ(馬借は荷物を馬の背中に乗せて運ばせる運動業者で，車借は車に荷物を乗せて，それを牛や馬に引かせる運送業者)。

〔馬借〕

〔車借〕

ただ，人一人で運べるのは米俵一俵，馬一頭で運べるのは米俵二俵が限界なので，大量の商品を輸送する時は船を使う。こうした水上輸

〔借上〕

さて，貨幣経済が浸透すると，そのお金を利用した高利貸しも登場する。まぁ，簡単に言えば，現代のアイフル・アコムのような「お金を貸して利子をとる」金融業者だね。それが鎌倉時代の借上(かしあげ)や，室町時代の土倉(どそう)・酒屋(さかや)だ(土倉は質物を保管する倉からついた名称で，酒屋は酒を売る酒屋が金貸し業も始めるようになったもの)。

だから，生活に困った武士や農民たちは，こうした金融業者にお金を借りに行って，さらに貨幣経済に巻き込まれるようになる。でも，できることなら金融業者にお金を借りに行くのは避けたい。そこで，農村では農民達が自分たちでそれぞれお金を出し合って，お金を貸し合う頼母子(たのもし)や無尽(むじん)というものもあったんだ(地域ごとに呼び名が異なるだけで，頼母子・無尽も中身は同じ)。これは，参加者のみんなでお金を出し合い，抽選をして，その中の一人にそのお金を貸すというもの。まあ，当然全員がもらえるまで最後までちゃんと続けるんだけどね。

なお,ここまで記してきたものを論述的にまとめると(図解Note①の内容を文章にまとめてみると)，「二毛作・肥料の使用など農業生産力が向上したことで，手工業品の生産・商品作物の栽培など諸産業が発達し，見世棚や定期市の開催，座の発達など商品経済が活発化した。さらに，宋銭・明銭などの中国銭が流入したことで，貨幣経済が浸透し，借上・土倉・酒屋などの金融業者が登場し，年貢の銭納も行われるようなった。また，行商人や運送業者が登場し，為替も利用されたことで，遠隔地の取引も活発化した。」ということになる。

［D］座の発達－テキストP30対応－

商業取引が活発化すると，それを販売する商工業者は，その利益を独占しようと考える。例えば，君たちが油売りの商人だとしよう。この時代，寺社や公家の灯用として油の需要が増えていたので，利益を拡大していたんだけど，「私も油商人になりたいんですけど～」と新しく参入しようとする奴が出てくる。そうなると，競争相手が増えるわけだから，君たちの利益は少なくなってしまう。

そこで，もともと油を売っていた油商人たちで同業者組合を作って，新儀商人(しんぎしょうにん)(新しい商人)が参入できないようにしてしまえばいい。それが，商工業者による同業組合の座(ざ)なんだ。まあ，簡単に言えば「商工業者が自分たちで利益を独占できるように結成したグループ」ってこと。そして，その「座」に所属するメンバーたちを座衆(ざしゅう)と呼ぶんだ。

でも，ちょいと待て。「新しい商人が入ってこられないように同業者組合を作る」と言ったけど，彼ら商人にそんな権限があるのかな？当然あるわけないよね。こういった権限を持っているのは，貴族や寺社などの特権的な人たちだ。そこで，本所(ほんじょ)と呼ばれる貴族や寺社などの権力も持った人たちのもとに保護を求めに行くんだ。

座衆「すいません，貴族様。私たちだけしか油を売ってはならないという特権を認めていただきたいのです。あと，その油の原料を輸送するにあたって関所などを通行するので，その関所で徴収される関銭も免除していただけるとありがたいのですが…。」

本所「いいだろう。ただし，お前たちはそれによって利益を独占できるわけだから，それなりの見返りはあるだろうな？」

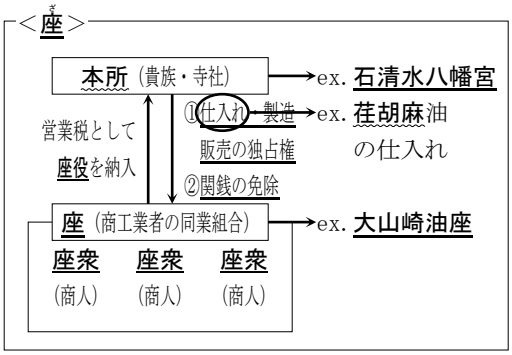
座衆「もちろんです。営業税としてそれなりのお金をお支払いたします。」

この座が本所に納める営業税のことを座役(ざやく)といい，座は座役を納める代わりに，仕入れや販売の独

占権や関銭(関所でかかる通行税)の免除などの権限をもらうんだ。

© 不許複製禁転載

こうした座の例として最も代表的なものが，京都の大山崎を本拠にした油売りたちが組織した大山崎油座だ。彼らは，石清水八幡宮という神社を本所として，仕入れ・製造・販売の独占権や，関銭の免除などの権限をもらったわけだ。なお，この大山崎の油座が独占権として認められた「仕入れ」にあたる油の原料って何だかわかるかな？



そう，商品作物の箇所で既述した油の原料となる荏胡麻だ(油の原料は中世まで荏胡麻が中心で，近世以降は菜種が中心となった)。荏胡麻の生産地は近江国(現在の滋賀県)・美濃国(現在の岐阜県)・尾張国(現在の愛知県西部)なので，原料である荏胡麻を買い付ける際には，途中で関所を通過しなければならない。そこで，関所で徴収される関銭を免除してもらい，さらに荏胡麻油の仕入れや販売の独占権などを認めてもらう代わりに，営業税の座役を本所である石清水八幡宮に納めるわけだ。

このような座と本所の関係で有名なのは，石清水八幡宮を本所とした大山崎油座以外にも，北野神社を本所とした酒麹座の，祇園社を本所とした綿座，公家の三条西家を本所とした青苧座などが有名だね(酒麹とは酒の原料である麹のこと，綿は木綿のこと，青苧とは麻の原料である苧のこと)。

＜座の成立・確立・発展＞

座が成立した時期は，平安時代末期に遡る。院政期に荘園公領制が確立すると，各地の荘園・公領から荘園領主の住む京都へ年貢・公事が納められるようになり，京都は商業都市としても発展するようになった。ただ，その京都には，もともと朝廷に属して天皇家に品物や食料を貢納・奉仕していた供御人や，神社に従属して労働・雑役を奉仕していた神人と呼ばれる人々がいた。そこで，彼らは貢物を納めたり労働に奉仕する代わりに，販売の独占や税の免除などを認めてもらうようになったんだ(神人は神社に仕える者)。つまり，これこそが座の始まりだね。そして，鎌倉時代になるとその数が増加して確立され，室町時代に発展していくことになるんだ。

しかし，こういった座があると，新儀商人(新しい商人)が参加できないことで，経済が活性化しないという問題点が出てくる。例えば，新しい商人が安くて持続性のある油を開発したとしても，座の存在があるため販売することができなかったりする。そこで，戦国時代になると，織田信長をはじめとした各地の戦国大名は，座を廃止させるための楽市令(楽市・楽座)という法令を発布していくんだ。

＜楽市令(楽市・楽座)＞

楽市令は，1549 年に近江国の六角定頼が居城のある観音寺城で発布した楽市令が最初のものとされている。その後，織田信長が 1567 年に美濃国加納で発布した楽市令や(1567 年に美濃国の斎藤氏を攻略した後，斎藤氏の居城の稲葉山城を岐阜城と改名し，その地で発布した)，1577 年に近江国安土城下町で発布した楽市令(1576 年に築城した安土城の城下町で発布した)が有名になる。

ただし，「楽市令」の他にも「楽座令」という法令もある。「楽座令」は座の特権を否定した法令なんだけど，「楽市令」は座の特権も認めず，さらに関銭などもかからず自由に通行ができて，市場での課税も免除されるという，「誰でも自由に商売ができる」法令。つまり，「楽市令」を出せば，「楽座令」の内容もひっくるめることになるので，戦国大名が発布したほとんどが「楽市令」なんだ。そして，この「楽市令」によって，市場での課税が免除される「楽市」，座の存在しない「楽座」の状態が出来上がるので，これを「楽市・楽座」とも呼ぶんだ。なので，解答する時には「楽市令」，または「楽市・楽座」と書くようにしてほしい(「楽市・楽座令」と書くと，楽市令と楽座令の 2 つを発布したという意味になってしまうため×にされてしまう)。

［E］惣(惣村)の形成－テキストP31 対応－

鎌倉・室町時代に農業生産力が向上したことで，名主層などの有力農民が成長し，小農民の中でも名主から土地を借りて加地子という小作料を納める作人なども生まれていった(鎌倉時代の［武士の生活(P25)］で学習済み)。

また，鎌倉時代における地頭請・下地中分など地頭の荘園侵略や，室町時代における半済令・守護請など守護の荘園侵略が進んだことで，貴族・寺社などの荘園領主の支配力は弱まり，荘園制の崩壊が進展していった。つまり，貴族・寺社などの荘園領主が所有する各地の荘園・公領で，地頭(国人)や守護が力を強めたため，地方の荘園・公領に対する荘園領主の力が弱体化したということ。

さらに，南北朝の動乱などの戦乱が続くと，農民達が住んでいる村が戦場になることがあるので，戦乱の多発に対する自衛の必要性も出てくる。

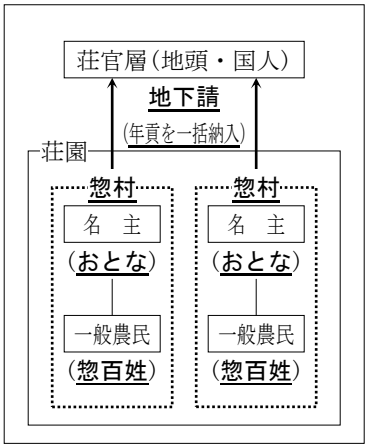
そのため，農民たちは「オラたちの生活にはゆとりが出てきただ。でも，オラたちの荘園を管理する地頭(国人)層は戦に明け暮れとる。かといって，荘園領主様に頼ったところで，あの方たちにはもはやどうする力もねえ。だから，オラたちの村はオラたちで守っていくべ。んで，オラたちの村はオラたちのルールでまとめていくだ！」と考えるようになり，近くに住む者たちは，その土地を中心に結びつくようになっていくんだ。

こうして，南北朝時代の頃から惣(惣村)と呼ばれる畿内を中心に農民たちが地縁的に結び付いた自治的な村が各地の荘園・国衙領(公領)の中にいくつも生まれていくんだ(農民たちが住んでいる土地を基盤(地縁的)に結びついて，自分たちで政治を行う(自治的)ということ)。

じゃあ，農民が自分たちで政治を行ってくためには，どんなものが必要だろう？具体的にイメージをつかめるように，「自分でサークルか同好会を立ち上げたとしたら」と置き換えて考えてみよう。

自分たちで運営していくためには，まずは「①リーダー」が必要。でも，一人で運営を進めていくと不満もおきるから，皆で話し合う「②会議」も開かないといけない。それから，皆が勝手な行動をしないように「③ルール(規約)」をつくる必要もあるし，そのルール(規約)を破った者に対しては罰則などの「④制裁」を加えないといけないよね。

上記のようなものを，惣村を構成する村人たちも作りあげていったんだ。まずは惣村の「①リーダー」が必要になる。そのリーダーには，有力農民の名主などが就任するのが妥当かな。彼らは小作人層である作人に自分の土地を貸し与え，彼らから加地子という小作料を徴収して地主化していた。だから，名主層の者が村の代表者となり，乙名(おとな)や沙汰人などと呼ばれるようになっていくんだ(地域によって名称が異なるだけで特に違いはない)。そして，その名主を含めた一般農民など惣村を構成する百姓のことを惣百姓という。



＜地侍＞

惣村を束ねる名主層は，惣村内で権力を持ち，さらに下人・所従などを隷属させているため，戦などが起きた場合には5人程の兵力を動員する軍事力も持っていた。ここに着目した戦国大名や国人層の中には，彼ら名主層を家臣に取り込み主従関係を結ぶ者も出てくるんだ。こうした名主層の中で，戦国大名や国人と主従関係を結び，侍の身分を獲得した有力農民を地侍と言う。例えば，木下秀吉(のちの羽柴秀吉・豊臣秀吉)や，豊臣秀吉の家臣として活躍した蜂須賀小六もこの出身だと言われている。

そして，「おとな・沙汰人」を中心に村人による「②会議」の**寄合**が開かれるんだけど(ただし，寄合にはすべての村人が参加できるわけではなく，下人・所従や作人などは参加できなかった)，その寄合ではどういったことを話し合うんだろう？ここで話し合う内容は，農業をする上で必要な用水を管理・配分する**番水制**や，**入会地**という山や川など村民の共同利用地に関すること。そして，この用水を勝手に使用したり，入会地で刈敷や草木灰を取りすぎたりしないように，などといった「③ルール」が，村の掟にあたる**惣掟**(**村掟**・**地下掟**)に定められたんだ。

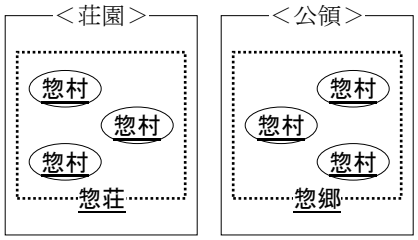
ⓒ 惣村－**惣掟**(**村掟**・**地下掟**)－『今堀日吉神社文書』

定　**今堀地下掟**の事　合　延徳元年十一月四日
一，惣ヨリ屋敷請候て，村人ニテ無キ物置くへからさる事
一，惣の地ト私ノ地トサイメ相論は金ニテすますへシ
(定む　**今堀**(現在の滋賀県八日市市今堀町)**地下掟**の事　延徳元年(1489 年)11 月 4 日の寄合で決定
一，惣(惣村)より屋敷を借り請けて，村人でない者をおいてはいけない。
一，惣(惣村)の土地と個人の土地との境界争いについては，金銭で解決すること。)

でも，こういった掟(ルール)を定めても，中にはそれを守らない人間も出てくる。そこで，こういった村の掟を守れない者には，村人全員からの「④制裁」を加えるんだ。こうした違反者に制裁を加える警察権の行使を**自検断**(**地下検断**)という(「険」・「団」・「段」ではない)。また，惣村は名主層を中心に村民が結びついているので，地頭(国人)層に納める年貢なども名主が村を代表して一括で納めるようになっていく。この惣村でまとめて年貢を納めることを**地下請**(**百姓請**・**村請**)というんだ。

＜**惣荘**・**惣郷**＞

あくまでも惣(惣村)は，荘園・国衙領(公領)内に複数出来上がっていき，それぞれの惣村で自治が行われる。ただし，場合によっては荘園・国衙領(公領)内にあるいくつもの惣村が一つにまとまることもある。荘園内にある惣(惣村)が一つにまとまっている場合は**惣荘**，郡・郷・保などの国衙領(公領)内にある惣(惣村)が一つにとまっている場合は**惣郷**という。



［F］一揆の形成－テキスト P31 対応－

こうした惣村が形成されていく中で，村人の結びつきを強める中心となっていったのが**宮座**と呼ばれる「神社の氏子組織」だ。…たぶん君たちは「ウジコ？何それ？おいしいの？」のレベルだろう。

村人が住む地域にはそれぞれ神社があって，「氏神」と呼ばれる祖先の神や，「産土神」・「鎮守神」と呼ばれるその地域に住む人々や土地を守ってくれる神が祀られている。そして，その神様を信じている人々のことを「氏子」という。なお，日本人であれば，自分が住んでいる地域の神社の「氏子」として強制的にカウントされるので，君たちも地元の神社の「氏子」ということになる。まあ，実際に「氏子」として活動しているのは，お祭りなどの際に中心的な役割を行っている人たちなので，君たちは幽霊部員ならぬ幽霊氏子みたいなものだけどね。

この「神社の氏子組織」のにあたる宮座構成しているのは，名主層などの乙名(おとな)・中老(乙名の次に発言権をもつ中年層)・若衆(将来的なリーダー層になる若者層)といったメンバーで，彼らが村の神事や祭礼などを行っていく。だから，宮座を説明する時には「農民の祭祀組織」と言ったり

つまり，有力農民の名主層はいろいろな顔を持っていると考えるといい。惣村のリーダーの立場となると「乙名（おとな）・沙汰人」と呼ばれるし，神社の氏子組織である「宮座」の一員でもあり，さらに戦国大名と主従関係を結んで侍の身分を獲得すると「地侍」と呼ばれることもわけだ。

さて，とある村で凶作が起きてしまったとしよう。そうした場合，宮座を中心に村人たちが神社に集まって話し合いを行うんだ。

村人A「オラさ，今年は年貢納めるの難しいだ。」
村人B「オラもだ。荘園領主様に年貢を下げてもらえるようにお願いすっか？」
村人C「んだんだ。じゃあ，みんなでお願いしてみっぺ。」
宮　座「ほんだら，一致団結すっためにちょっとした儀式行うべ。」

ここで行われる儀式を一味神水という。これは，誓約を記した起請文という一枚の紙に，参加する者の名前をそれぞれ書き込ませていく。そして，皆が名前を書き込んだら，その起請文を焼いて水に混ぜ，それを皆で回し飲みするんだ。これによって，試合前に円陣を組んで一致団結するように，共通の目的で集まった集団が出来上がる。この共通の目的で集まった一味同心という連帯意識を持った人々の集団を一揆というんだ。一揆というと，よく暴力行為を連想する生徒が多いけど，あくまでも一揆というのは「一つ」にまとまることを指す。

そして，年貢を下げてもらえるように，百姓申状という文書を荘園領主に提出したりする（これを愁訴という）。ただし，それが受け入れられない場合もある。そうしたら，今までの文書のような生易しいものではなく，荘園領主の屋敷に「年貢を下げてくれ！」と集団で押しかけに行ったりするんだ（これを強訴という）。しかし，それでも受け入れられない場合はどうするか？その場合は，みんなで自分たちの住む荘園から立ち退いてしまうんだ（これを逃散という）。そして，山入りと言って，皆で何日間も山に逃げ込んで働くのを拒否する。まあ，農民によるストライキってことだね。これをされると，荘園領主は年貢を徴収できなくなってしまうので，農民たちの要求を呑んであげるしかないもんね。こうした愁訴・強訴・逃散のように，荘園・公領内で荘園領主に対して起こす一揆のことを荘家の一揆という。

上記のようなことは鎌倉時代の頃にも起きていたんだけど，室町時代になると畿内の農民たちは惣村によって結びつくようになった。さらに，農村に貨幣経済が浸透し，土倉・酒屋から借金・土地の質入れをしていたため，荘園・公領などの領主の枠を超えて，周辺の惣村が広く結合し，その規模が大きくなっていく。こうして，土民（支配者層からみた蔑称）と呼ばれる一般庶民による土一揆が起きていくんだ。

そして，彼ら土民は惣村を基盤に土倉・酒屋を襲い，借金の証文を破り捨てて，借金をなかったことにしたり，すでに売り払ってしまった土地を取り戻したりするんだ。こういった実力で債務を破棄すること，つまり勝手に借金をチャラにしてしまうことを私徳政という（本来，徳政とは税金免除などの善政のことをいったが，中世以降は債務の破棄を指すようになった）。

でも，これは幕府が認めたわけでなく，勝手に借金をチャラにしただけ。もしかして，幕府がそれを認めず，いつかまた借金を請求されてしまう可能性もある。そこで，私徳政で勝手に借金をチャラにした後に，今度は幕府に正式に徳政令を出せと要求するんだ（これを徳政一揆という）。

なお，この他にも一揆にはいろいろ種類があって，国人が守護の支配に対して抵抗する国人一揆，国人を中心に土民などが加わる国一揆，浄土真宗（一向宗）の信者による一向一揆，日蓮宗（法華宗）の信者に

＜一揆の種類＞
土　一　揆…土民（一般庶民）による一揆
国人一揆…国人（地方武士）による一揆
国　一　揆…国人を中心に土民も加わった一揆
一向一揆…浄土真宗（一向宗）信者による一揆
法華一揆…日蓮宗（法華宗）信者による一揆

よる**法華一揆**がある。

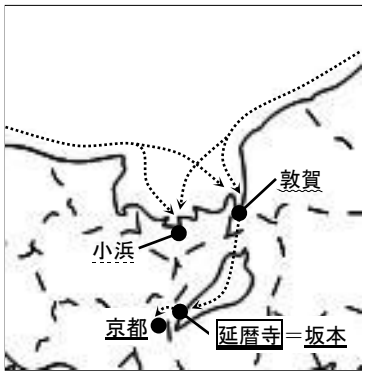
［E］中世の都市－テキストP34対応－

テキストのスペースの都合上，P34に挿入する形になってしまったが，鎌倉～室町・戦国時代にかけて重要な役割を担った港町(陸海交通の要地・貿易や商業地に発達した町)・商人によって自治運営された自由都市(自治都市)・**寺内町**(浄土真宗・日蓮宗の寺院や道場に発達した町)・**門前町**(浄土真宗以外の一般の寺社の門前に発達した町)・城下町(大名の居城を中心に発達した町)などの都市も問われることがある。ただ，P34を見てみると，都市が羅列されていることで，ほとんどの受験生が「うわ…」となる箇所だと思う。一般的には丸暗記させることが多いことが箇所なんだけど，それは違う。

例えば，現在の日米修好通商条約時には人口300人に過ぎなかった横浜が，現在は300万人以上の大都市に発展したのには，1859年から開港場として貿易が始まり，1872年に東京の新橋～横浜間に鉄道が敷設されて，人と物の動きが活発化したことなどが背景にあげられる。

同じように，この中世の都市も人と物の動きが活発化していったことで発達していったことが大きな背景にあげられるんだ。なので，地図も参照しながらそれぞれの都市がなぜ発展していったのかを説明していくと，面白さが感じられるんじゃないかと思う。

中世の都市を考える上で，一番重要な都市にあたるのが**京都**になる。荘園公領制を柱とする中世において，京都は天皇・皇族という荘園領主がいる場所であり，室町時代には幕府も京都に置かれため，全国の荘園・公領から年貢・公事などの物資は京都に集結する。じゃあ，京都に大量の物資を運ぶには，馬借・車借によって陸路で輸送したり，廻船によって海路で輸送したりすることになるよね。ただし，馬借が運べる量は米2俵が限界で，大量の物資は廻船で運ぶことになるので，そのため廻船が停泊できる京都に近い港町が発展していくことになるんだ。



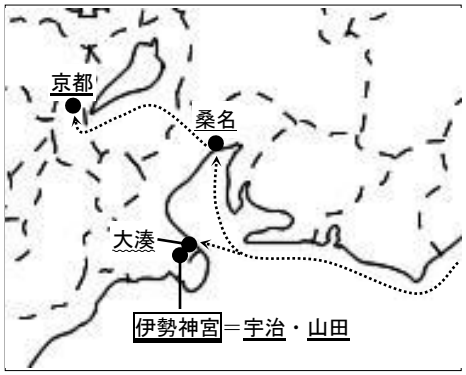
その中で，北陸地方の代表格が古代には**松原客院**(テキストP15でも説明済みの渤海使を接待する施設)が置かれていた**敦賀**(越前国)や，2009年にアメリカのオバマ大統領が当選した際に便乗したことでも知られる**小浜**(若狭国)だ(頻度が低いため小浜はテキストに記載していない)。主に北陸地方や山陰地方・九州北部からの物資を輸送する際には敦賀・小浜で陸揚げされるんだけど，その輸送量は琵琶湖に近い敦賀の方が多い。敦賀で陸揚げして陸路で琵琶湖まで送れば，船を使って琵琶湖の西南部にまで一挙に輸送できるでしょ？だから，その琵琶湖の西南部にあり，なおかつ比叡山**延暦寺**の**門前町**でもあった**坂本**(近江国)は飛躍的に発展するんだ。そして，坂本に運ばれた物資は運送業者である馬借が陸路で京都にまで輸送するわけだね。

そのため，坂本には馬借が多くいたんだけど，既に室町時代まで学習したことがある生徒や[授業解説(室町幕府の動揺)]を読んだ生徒の中には，「近江国の坂本」・「馬借」という言葉でピンときた者もいるんじゃないだろうか。**1428年**に起きた**正長の土一揆(徳政一揆)**は**近江国坂本**の**馬借**が蜂起したことがきっかけだったよね？そして，馬借は運送業者であることから情報の伝達に優れているので，これがあっという間に畿内一帯に広がり**土民**(一般庶民)が**酒屋**・**土倉**・寺院を襲撃して借金の証文などを破り捨てていいったわけだ。

一方で，関東・東海地方などからの物資は主に伊勢国(現在の三重県)の**桑名**で陸揚げされて，そのまま陸路で京都まで輸送されることが多い。ゲーム版『信長の野望』において織田信長(尾張国の戦国大名)でスタートする場合は，尾張国のすぐ近くに位置する桑名を押さえることをおススメする。

©無断複製禁転載

一方で，伊勢国(現在の三重県)の南部に位置する大湊は同じ港町といっても，北部に位置する桑名とは役割が異なる。地図を見てもらえばわかるように，大湊から少し西には日本No.1の神社である伊勢神宮があり，その門前町として栄えた伊勢国の宇治・山田があるよね。その伊勢神宮へ参拝する場合や貢納物を送る場合に，この大湊が利用されるわけだ。なので，この大湊は「伊勢神宮の外港として栄えた」と説明されることが多いんだ(外港とは内陸の重要都市の近くに位置して，その都市の港の機能を果たした港町のこと。現在における具体例としては，東京の外港として栄えたのが横浜になる)。



＜門前町＞

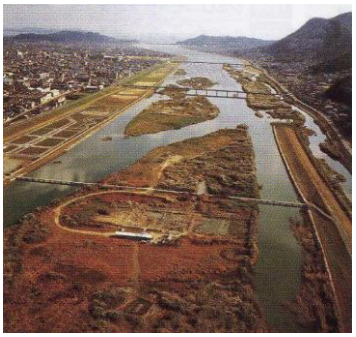
ここまで延暦寺の門前町として栄えた坂本(近江国)・伊勢神宮の門前町として栄えた宇治・山田(伊勢国)をサラッと説明して済ましていたことにお気づきだろうか。門前町については最初に軽く補足程度に説明しただけなんだけど，有名な寺院や神社のまわりには住宅が立ち並んでいって大きな町が形成されることが多い(現在でも地方の有名な寺院や神社に行く途中には，土産屋や飲食店がいっぱいあるでしょ？)。

どれぐらいの規模か想像しづらいと思うので，長野県民で知らない人はいない善光寺の門前町として栄えた信濃国(現在の長野県)の長野に僕が行った時の話をしよう。善光寺のお坊さんに「善光寺に来るまでの道のりで門前町を見てきたんですが，昔はどれぐらいの規模だったのですか？」と尋ねたら，「昔はここからJR長野駅あたりまでが門前町だったそうですよ」と答えてくれたんだけど，その時はビックリした。え～，JR長野駅から善光寺までは8kmぐらいあるので，それほど大規模な町が広がっていたということなんですわ。

このような寺院や神社のまわりに栄えた町は2種類に分けることができて，浄土真宗・日蓮宗の寺院や道場に発達した町は寺内町，浄土真宗以外の一般の寺社の門前に発達した町は門前町というんだ。そして，ここまで紹介した比叡山延暦寺(天台宗の寺院)・伊勢神宮(神社)・善光寺(無宗派の寺院)はすべて浄土真宗・日蓮宗以外にあたるので，それぞれのまわりに栄えた坂本(近江国)・宇治・山田(伊勢国)・長野(信濃国)はすべて門前町になる。なお，浄土真宗・日蓮宗の寺院のまわりに栄えた寺内町は後述するけど，寺内町と門前町で混乱しそうだったら，右のようにまとめておけばいいかな。

＜寺内町の覚え方＞
寺内町の「じ」と浄土真宗の「じ」でつなげる

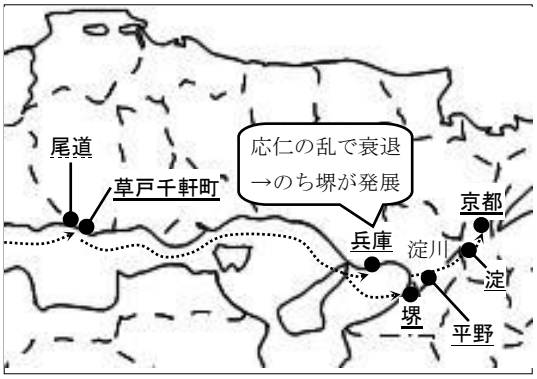
では，今度は瀬戸内海からのルートを考えてみよう。九州地方・山陽地方・四国地方からの商品は瀬戸内海を通じて京都へと送られるわけだけど，その途中に位置する中継港として発展したのが備後国(現在の広島県東部)の草戸千軒町や尾道だ(頻度が低いため尾道はテキストに記載されていない)。前者の草戸千軒町は中世まで港町として栄えていたんだけど，江戸時代に芦田川の洪水によって水没してしまったと言われていた町だ。戦後に行われた発掘調査の結果，庶民の日常生活を示す遺構や遺物が大量に出土したことで，今まで知られていなかった中世の民衆生活が解明され，さらに実在していたことがわかった現代における『幻の町』ってやつだね。そのため右の写真のように芦田川の川底にある遺跡ということで草戸


〔草戸千軒町遺跡〕

そして，その瀬戸内海を経由して商品が畿内に陸揚げされる際の港町として発展したのが摂津国の兵庫，和泉国の堺だ。まず，そもそも兵庫に関しては，平安時代末期に日宋貿易のために平清盛が修築した大輪田泊が鎌倉時代に兵庫津と改称されたものなので，中世以降は国内最大の港として，さらに室町時代には日明貿易の拠点としてさらに発展していったんだ。ということは，国内第一の港としてたくさんの船が入港するならば，ここに兵庫関という関所を設ければ関銭を徴収して一儲けすることができる。そのため，兵庫には東大寺が支配する兵庫北関と興福寺が支配する兵庫南関の2つも関所があって，そのうち，東大寺が支配していた兵庫北関には1445年の1年間だけで2700隻もの船が入船していた記録の『兵庫北関入船納帳』が残っている。これは，兵庫でどれだけ活発な取引が行われていたかということを示す帳簿になるわけだね。

しかし，1467年に応仁の乱が起きると兵庫にまで飛び火して，東軍・西軍が兵庫を巡って衝突したことで戦火にまみれてしまい兵庫は衰退してしまう…。そして，その兵庫に代わる形で停泊していた船舶の多くは和泉国の堺を新たな港として利用するようになり，特に細川氏と結びついて日明貿易の拠点として飛躍的に発展していくことになるんだ。

そして，九州地方・四国地方・山陽地方など西国からの物資は瀬戸内海を経て，これら摂津の兵庫・平野や和泉の堺といった畿内の港に陸揚げされてここから京都へ輸送されることになる。でも，そこから陸路で京都まで運ぶ必要はない。畿内には琵琶湖から大阪湾に流れる淀川水運があるよね。なので，淀川を通じて京都の南に位置する山城国の淀いう都市まで船で運んで，淀から京都までは陸路で輸送すればいい。ゆえに，テキストには淀について「西国から送られる京都の外港として栄える」と記されているわけだ。



＜自由都市（自治都市）＞

上述したように，応仁の乱によって摂津国の兵庫が衰退したことで，貿易の中心地は和泉国の堺へと代わり，さらに細川氏と結んだことで日明貿易でも飛躍的に発展していった。ゆえに，リッチな商人が多くいる堺では，彼ら商人たちによる自治が行われるようになっていくんだ。

「自治」と言われても想像しづらいだろうから，具体的に説明すると堺には会合衆と呼ばれる36人の豪商がいて，この町では商人たちが自ら政治を行っていたんだ（このような商人による自治が行われた都市を自治都市とか自由都市という）。…じゃあ，戦国大名とかが攻め込んできたらどうするの？という質問もあるけど，豪商たちはお金をたくさん持っているんだから，傭兵を雇って撃退しちゃえばいいじゃん。なお，こうした自治都市（自由都市）としては，港町のところでも登場した大湊（伊勢国）や桑名（伊勢国）や，門前町としても栄えた平野（摂津国）も挙げられるけど，自治都市（自由都市）として出題される頻度は低くなるね。

そして，堺と同じような自治都市（自由都市）として有名なのが九州地方の博多で，この町も年行司と呼ばれる12人の豪商によって運営されていた（一年交替でリーダーが代わることから年行司という）。また，京都でも町衆と呼ばれる富裕な商工業者による自治が行われていたんだけど，その中心となったメンバーは月行事という（一か月交替でリーダーが代わることから月行事という）。なお，博多における年行司の「司」と京都における月行事の「事」の漢字の違いは，日本史大辞典などでは「年行司＝年行事とも書く」，「月行事＝月行司とも書く」となっているので本来はどちらでもいいんだけど，教科書や用語集では**太字**の漢字で記述されてしまっているので，入試では教科書・用語集に合わせた漢字で書いておいた方が無難かな。

でもねー，この京都の富裕な商工業者の町衆ってちょっと面倒くさいのよね。彼らの頑張りによって，応仁の乱後に途絶えていた祇園祭が再興されたことは評価したいんだけど，この京都の町衆の人々には日蓮宗（法華宗ともいう）の信者が多いのよね…。日蓮宗（法華宗）について詳しくは文化史で説明することになるけど，日蓮宗（法華宗）というのは「日蓮宗こそが最高の教え。他の宗派なんかはクソくらえ！」という他宗排撃の考え方を特徴としている。そのため，のちに浄土真宗（一向宗）という別の宗派が京都に進出してくると，それを追い出すために法華一揆（日蓮宗（法華宗）の一揆なので法華一揆という）を結成して浄土真宗の寺院を焼き打ちしてしまうんだ（詳細は後述する）。

九州の代表的な都市として，年行司と呼ばれる12人の豪商による自治が行われた博多を＜自由都市（自治都市）＞で説明したけど，九州にある港町として最後に薩摩国（現在の鹿児島県）の坊津を紹介しておこう。薩摩の戦国大名である島津氏の城下町である鹿児島の南西に位置していて，「津」という漢字が「港」を指すということは何度か説明してきたので，坊津が港町であるのはすぐにわかるだろう。そして，鹿児島県であれば中国の明や琉球と地理的に近い。なので，15世紀以後は遣明船が発航する地として，島津氏にとっての対明や対琉球貿易の拠点として栄えた港町になるんだ。

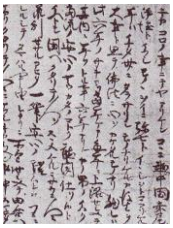
＜浄土真宗の広まり（文化史で学習する箇所）＞

鎌倉時代に親鸞が開いたものに浄土真宗という宗派がある。浄土真宗は，阿弥陀如来を信じ，「南無阿弥陀仏」と念仏をひたすら唱えれば救われるという教えであったことから一向宗とも呼ばれる（一向とはひたすらという意味）。

その浄土真宗の中で本願寺派というグループが室町時代にかけてブレイクしていくんだけど，その火付け役となったのが「本願寺中興の祖」といわれる本願寺8世法主の蓮如という僧侶なんだ。

〔蓮如〕

1471年，蓮如は北陸地方に赴いて，越前国（現在の福井県）に設けた吉崎道場という拠点を中心に布教を始めた。でも，蓮如の教えが難しかったためか，初めは人々にあまりウケなかった。そこで，誰でもわかるように，念仏の教えをかな文字まじりの平易な文書にしてみたんだ（これを御文という）。そしたら，これがきっかけとなって浄土真宗は北陸地方で爆発的に大ヒット。


〔御文〕

瞬く間に加賀国（現在の石川県）などにも広がっていき，各地の惣村に「講」と呼ばれる浄土真宗を信仰することで結ばれた集団が組織されていったんだ（のちに守護大名や戦国大名と対立し，浄土真宗（一向宗）信者による一向一揆が各地で多発することになる）。

こうした浄土真宗（一向宗）や日蓮宗（法華宗）の寺院や道場のまわりに，その信者たちが家を構えていったことから，寺内町と呼ばれる大規模な町が形成されていく。その代表格が蓮如の布教拠点となった越前国（現在の福井県）の吉崎道場になるわけだ。ただ，当初は協力関係にあった加賀国の守護大名であった富樫政親に迫害されるようになったため（詳細は授業解説［室町幕府の動揺］を参照），そののち蓮如は吉崎を去って1478年に山城国（現在の京都府）に山科本願寺を建立することになるんだ（その後，子の実如に跡を譲ると1496年に摂津国（現在の大阪府北部・兵庫県東部）の大坂に石山本願寺を建立して隠居生活に入った）。

〔吉崎道場〕

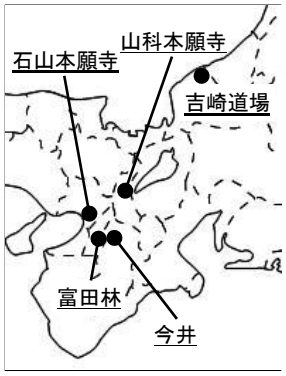
ただね～，この山城国（現在の京都府）の山科本願寺は危ないよ？なぜなら，上述したように京都には日蓮宗（法華宗）の信者が多くて，彼らは他宗排撃の考え方

を持っているからね。日蓮宗(法華宗)から出た社会経済史[解説]よそ者が何来てんだよ許複製禁転載

〔石山本願寺復元模型図〕

そして，その日蓮宗(法華宗)が爆発してしまったのが 1532 年で，近江の六角定頼と協力した法華一揆(日蓮宗(法華宗)の信者による一揆)によって山科本願寺は焼き打ちされてしまったんだ。そのため，浄土真宗(一向宗)は拠点を摂津国(現在の大阪府北部・兵庫県東部)の大坂石山本願寺に拠点を移すことになり，以後は戦国大名を戦慄させる一向一揆(浄土真宗(一向宗)の信者による一揆)のネットワーク総本山となっていく(のち,石山本願寺は 11 世法主の顕如の時期に織田信長と対立して 1570 年から 1580 年に石山合戦(石山戦争)で戦うことになるが，1580 年に朝廷の仲介で講和が成立すると石山から退去する。そして，その石山本願寺跡地に豊臣秀吉が大坂城を 1583 年から築城することになる)。

ここまで出てきた越前国の吉崎道場，山城国の山科本願寺，摂津国の石山本願寺が寺内町の代表格になるんだけど(石山本願寺復元模型図の写真を見てみるとわかりやすいが,石山本願寺のまわりに出来上がったたくさんの家などによって寺内町が出来上がる)，余裕があったらその他の河内国の富田林や大和国の今井なんかも押さえておければ十分だね。



最後は浄土真宗以外の一般寺社のまわりに形成された門前町が残っているけど,これは港町のところと関連させて延暦寺の坂本,善光寺の長野,伊勢神宮の宇治・山田の全てを説明し終わっている。ただし，延暦寺に関しては文化史が問われるものがあり,先ほどの法華一揆と関連した出来事があるので追加説明しておこう。

1532年に山科本願寺を焼き打ちして京都から浄土真宗(一向宗)を追い出した法華一揆(日蓮宗(法華宗)の信者による一揆)は，京都で自治まで行う一大勢力となりでかい顔をしていた。そして，絶対に喧嘩を売ってはいけない比叡山延暦寺とも対立するようになっていった。その結果，1536年(天文5年)に近江の戦国大名六角定頼の援軍を受けた比叡山延暦寺によって(六角定頼は楽市令を初めて出した戦国大名としても知られる)，日蓮宗は京都にあった21本山(中心寺院のこと)を全て焼き払われてしまい，京都を追われることになるんだ(これを天文法華の乱という)。

でも,その法華一揆を焼き打ちした比叡山延暦寺も1571年に織田信長に焼き打ちされることになるし(延暦寺焼き打ち),その織田信長も1582年に明智光秀によって本能寺の業火に焼かれることになるんだから(本能寺の変)，それぞれ皮肉なものだよね。これらには本能寺も含めて寺院が関係しているし，「やった者は別の誰かにやられる」って因果応報ってやつかな…,因果応報は仏教用語だけにね(これは座布団一枚レベルじゃね？)。

＜法華一揆(1532)･天文法華の乱(1536)の考え方＞
①法華一揆(1532)……法華一揆 VS ~~山科本願寺~~
②天文法華の乱(1536)……比叡山延暦寺 VS ~~法華一揆~~
③延暦寺焼き打ち(1571)…織田信長 VS ~~比叡山延暦寺~~
④本能寺の変(1582)……明智光秀 VS ~~織田信長~~

［F］戦国大名の城下町－テキストP33対応－

教科書や参考書によっては，中世の都市として戦国大名の城下町を扱うこともあるのだが，僕が授業で扱う際には戦国時代における戦国大名と共に説明することが多い。でも，学校などで中世の都市

と一緒に学習した生徒もいると思うので，[解説]説明しておこうと思う。©不許複製禁転載

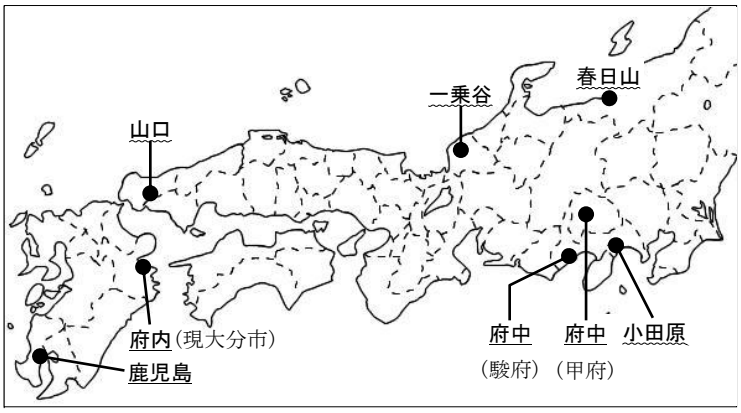
ただ注意点として，それぞれの戦国大名の位置関係や対立関係，また戦国大名が領国統治のために定めた分国法などを軸にして説明していくので，[戦国時代(テキストP33)]を学習した後の方が効率は良いと思う(既に学習が済んでいたら読み進めて大丈夫だろう)。

まず，戦国大名が定めた分国法の中で最も条文数が少ないことで有名な越前国(現在の福井県)の朝倉氏は，分国法の『朝倉孝景条々(朝倉敏景十七箇条)』の中で「家臣は朝倉の城下町である一乗谷に引っ越すこと」と記されているので，朝倉氏の城下町はもちろん一乗谷になる。

また，同じく分国法の『大内氏掟書(大内家壁書)』を定めた周防国・長門国(現在の山口県)の戦国大名である大内氏では，応仁の乱(1467)後に住む場所を失った京都の公家・文化人たちを自らの城下町である山口に招いたことから，山口は京文化が栄えて「小京都」とか「西の京都」と呼ばれたよね。なので，もちろん大内氏の城下町も山口になる。

一方，関東・東海・中部地方で覇権を争っていた戦国大名として，相模国(現在の神奈川県)の小田原を城下町とする北条氏，駿河国(現在の静岡県)の府中(のち駿河国の府中から駿府と呼ばれる)を城下町とする今川氏，甲斐国(現在の山梨県)の府中(のち甲斐国の府中から甲府と呼ばれる)を城下町とする武田氏が代表的だ。まあ，これら3大名も，相模の北条氏は初代の北条早雲が定めた『早雲寺殿二十一ヶ条』，駿河の今川氏は今川氏親が定めた『今川仮名目録』と子の今川義元が定めた『今川仮名目録追加』，甲斐の武田氏は武田信玄が定めた『甲州法度之次第(信玄家法)』のように分国法でも登場しているんだけどね。

この3大名は領土が隣接していたため対立しあっていたんだけど，それぞれの当主が北条氏康・今川義元・武田晴信(武田信玄)の時に(この3人とも[戦国大名]で登場する)，相互不可侵・軍事協定・領土協定・婚姻関係(3大名の娘がお互いに嫡男に嫁ぐビリヤード形式の婚姻同盟)などの甲相駿三国同盟と呼ばれる同盟関係が1554年に結ばれるんだ。そうすれば，相模の北条氏康は関東地方の制圧に，駿河の今川義元は東海地方の制圧に，甲斐の武田信玄は信州などの中部地方の制圧に力を注ぐことができるからね。

そうした中で，信濃国(現在の長野県)へと勢力を拡大した「甲斐の虎」と呼ばれた武田信玄は，越後国(現在の新潟県)の春日山を城下町とする上杉氏の「越後の龍」と呼ばれた上杉謙信と対立することになり，信濃国で川中島の戦いという5回に及ぶ合戦を繰り広げることになるんだ。

最後に。九州地方の代表的な戦国大名である豊後国(現在の大分県)の大友氏の城下町である府内(もともと国司の役所である国衙(国府)があった場所で現在の大分市)や，薩摩国(現在の鹿児島県)の島津氏の城下町である鹿児島は，南蛮貿易の貿易港としても栄えたことで知られていて[ヨーロッパ人の来航(テキスト P34)]でも登場するので，そこで覚えても問題ないかな。